第2回　特別研修会(DH向け)

特別講演
『歯周病患者のインプラント治療』

講師：弘岡　秀明先生　加藤　典先生

日時：平成29年10月1日(日)
場所：秋葉原UDXギャラリーネクスト

岡田　淳（栃木県）

平成29年10月1日に秋葉原UDXギャラリーネクスト2にてＤＨセミナーが開催されました。「歯周病患者のインプラント治療」というテーマで弘岡秀明先生、加藤典先生よりご講演を賜りました。現在、歯科医師はもとより、インプラント治療に携わる歯科衛生士にとって最も身近なテーマであるため、当日は知識を深めたいという会員が多数参加し、開会前の受付は長蛇の列ができるほどでした。定員は120名を予定していましたが、最終的には140余名が聴講し、会場は終日熱気に包まれていました。

午前中の弘岡先生の講演では、バックグラウンドとしての歯周病にスポットが当てられ、基礎的事項の確認に関してレクチャーされました。イントロダクションでは、国内外の学会や講演会で歯科医師と歯科衛生士が同じ場で同じ話を聞くのは大事なことであり、日常の歯周病治療の９割は歯科衛生士の仕事ではないかという見解が述べられ、本講演会の重要性が再認識させられました。スウェーデンのNational guidelinesの紹介から始まり、歯周病治療のアプローチは様々なグループによって違うが、EBMに基づくべきであると指摘されました。一方、歯周病治療のゴールも術者によって様々な設定がなされ、歯周病は主に軟組織に起こる病変であり、起炎性の付着物は可及的に除去すること、歯周病治療とはPCRを下げ、BOPを減少させることが肝要であること、そして歯周病学の世界的権威といったレジェンド達も「進行を止めること」こそが目的と紹介されました。その後、弘岡先生がご執筆された有名著書である「コレクテッドエビデンス」シリーズ(デンタルダイヤモンド社)や、「Dr.弘岡に聞く臨床的ペリオ講座」シリーズ(医歯薬出版)から多数の論文引用があり、主に非外科処置の有用性や外科処置との対比に関する解説と詳細なレビューがなされました。

午前中のレクチャーを踏まえ、午後のパートは「歯周炎患者のインプラント治療」へと繋がります。留学先のイェテボリ大学にて、天然歯列にインプラントが応用された症例としてとして1986年に報告された患者が、数年後にインプラント周囲炎に罹患して戻ってきたときの鮮烈なエピソードが紹介されました。それまで動物実験で検証

されていた周囲炎が、やはりヒトでも起きうるのだという確信が得られたと同時に、手術の際はLindhe教授、Ericsson教授、Lekholm教授といった専門家をもってしても手の打ちようがなく、困惑した空気であったということです。これは30年以上経った現在、われわれが臨床現場で持つ実感と、それほど変化していないのではないかと感じました。その後のリサーチでも、ブローネマルククリニックの患者のうち４人に一人が重度の骨吸収を起こしている(Fransson ら 2005年)とされ、次第にインプラント周囲炎の実態にスポットがあたる経緯が紹介されました。インプラント周囲炎に関する近年の定義(Consensus Report of the Sixth European Workshop on Periodontology 2008年)以来、最近の知見ではスウェーデンの全人口の15 %が周囲炎である可能性(Derks ら 2015年)も報告されました。一方、日本では平成28年の歯科疾患実態調査の結果を挙げられ、「人口の40 %には、顎骨の炎症がある」といったやや誇張されたメディアの取り上げ方には、疑問を呈されました。インプラント周囲炎の治療法に関しては現在のところ確定的な方法はなく、歯周疾患のように非外科処置では対応しきれないが、外科処置を比較したリサーチ(Charalampakis ら 2011年)によると、根尖側移動術＋抗生剤使用のグループが効果的であったと解説されました。インプラント周囲病変のリスクマネージメントに必要なことは、①術者と患者の両者がバイオフィルムの為害性に関して十分理解していること、②術前・術後の感染除去を徹底すること、③SPTの必要性、④禁煙、⑤適切な外科処置といったポイントを挙げられ、歯周病治療の治療にも共通した重要事項であることを再認識させられました。

加藤典先生の講演では、SRPのHow toに関する解説から始まり、「問診」は他の基礎資料収集にも勝る重要な情報源であると述べられ、まさに生の臨床現場から得られた知見であると、受講者は感じ入った様子でした。TBIのコツとして、パンフレットを読むが如くの平坦な説明は患者に３分で飽きられるため、抑揚をつけ関心を引くようなテーラーメイドの説明が必要であり、個別の患者対応の重要性を再認識しました。後半のSRPの限界や器具の到達性にも限界があることが論理的に示され、加藤先生のわかりやすい解説は、参加した歯科衛生士の多くが持つ日々の疑問の整理に役立った様子でした。

イェテボリ大学病院の３階では、右側が歯周病科(インプラントなし)、左側がブローネマルククリニック(スケーラなし)となっていて、どちらに曲がるかで弘岡先生の人生が決定づけられたという逸話は、大変興味深く、印象に残りました。スカンジナビアンアプローチを体系的に解説していただき、われわれの明日からの臨床に役立つ大変有用な情報をいただくことができました。